

「授業で習う」から「自ら学ぶ」に 学習習慣を早期に転換

新入生にどんな学習習慣を付けさせたいのか。そのためにはどのような取り組みを講じるべきなのか。小学校の学習スタイルとの違いや、ガイダンスの機能、定期テストの役割など、学習習慣を定着させるための方法について、2人の校長先生にお話を伺った。

「習う」と「学ぶ」の違いを 意識させる

——中学生として身に付けてほしい学習習慣をどのようにお考えですか。また、それを身に付けさせるために、入学初期の段階ではどのような指導をしていますか。

茅原 中学生に必要なのは、「習う」と「学ぶ」ことの違いを意識した学習姿勢だと思います。小学校までは授業で「習う」ことが学習の中心ですが、中学校では、授業で分からなかったことや自分に足りないことを、自ら「学ぶ」姿勢なくして学力は向上しません。

しかし、指導はなかなか難しいのが現状で

す。学力は入学段階で二極化していますし、学習習慣が定着していない生徒の方が多数を占めます。しかも、私が勤務する南葛西中学校のある江戸川区は、学校選択制を採用しています。本校の場合、2010年度は七つの小学校から入学しており、多種多様な学校教育を受けてきた生徒が混在しています。一斉授業の場で、単に「勉強してきなさい」と指示するだけでは、生徒は学びに向かわないのです。

だからこそ、「鉄は熱いうちに打て」というように、中学校に入学したばかりで、生徒が「変わるう」という意欲を持っているうちに、それに応えるような取り組みを講じることが重要です。本校では、各教科の最初の1

時間を、小学校との学習方法の違いや家庭学習の方法を伝えるガイダンスに充てています。加えて、家庭学習の成果が表れやすいような小テストを実施するなどして、「努力は報われる」という達成感をまずは持たせることを重視し、導入期ですぐに意欲を失ってしまわないように配慮しています。

洲上 授業で学んだことの見直しや、各教科で出された宿題に毎日、一定時間を充てて取り組むこと。これが中学生として最低限必要な学習習慣だと、私は考えています。

勤務する檜原村立檜原中学校では、「サブノート」を活用しています。授業で学んだことをもう一度まとめたり見直したりして、一冊のノートにファイリングしていくもので

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第3回

中学校導入期に学習習慣を定着させる

東京都江戸川区立南葛西中学校校長

茅原直樹

かやはら・なおき◎江東区立深川第七中学校、墨田区教育委員会事務局指導室統括指導主事などを経て、現職。
江戸川区立南葛西中学校◎東京東部の臨海地区に立地。学校選択制の下、過去3年間は7つの小学校から新入生が入学。生徒数は約380人。



東京都檜原村立檜原中学校校長

淵上勝則

ふちがみ・かつのり◎東大和市立第四中学校、東大和市立第五中学校教頭等を経て、現職。
檜原村立檜原中学校◎東京西部に位置する檜原村は、島嶼部を除いて東京都で唯一の村。村立の小学校、中学校は各1校。2011年度から小中一貫教育を行う予定。生徒数は51人。



す。先ほど茅原先生が言われたように、今の生徒はただ「しなさい」と言っても取り組まないで、宿題をプリントにして用意するなど、最初はある程度手をかけながら、学習習慣の定着を図っています。

また、南葛西中学校のように、本校も入学時にガイダンスを行い、「小学校の学習方法のままでは中学校の授業にはついていけないよ」と伝えます。

——小学校との学習スタイルとの違いという点では、定期テストに向けた勉強も中学校に入って初めての経験となります。

淵上 私は、定期テストに向けて計画的に学ぶことが、中学生らしい学習姿勢を身に付けるために重要なことだと考えています。小学校のように単元が終わったら即テストという流れではなく、複数の単元を見通した上で、どこをどのくらい勉強すればよいか、自分で計画的に考えて学習する力が、テスト勉強の過程で身に付くと思うからです。また、以前学んだ単元を忘れていないか、自分で学び直す力も必要です。

授業時間を確保するために、1年生1学期の中間テストを行わない学校が増えていると聞きましたが、本校では中学校の学習スタイルを体験させる重要な行事として中間テストを位置付け、5月末の実施を堅持しています。一定のテスト範囲について、自分で計画し、学習して、テストで確認し、答案が返ってきたら復習するというサイクルを出来るだけ早く体験させるためです。このサイクルに基づいた学習習慣を続けることが、最終的には高校入試対策にもつながると考えます。

た。本校は10年度に1学期の中間テストを廃止しました。出題できる範囲がほとんどないテストを行うよりも、まずは丁寧に指導しながらじっくり学習させていこうと考えたからです。その代わりに、期末テストの時期を6月中旬に前倒しました。しかし、淵上先生のお話を聞いて、実施時期についてはさまざまな考え方がありと改めて感じました。

単元レベルでの学力を早期に把握する

——ただ「勉強しなさい」と言うのではなく、学習方法を教えて支援することが求められるわけですが、個に応じた指導をするためには生徒の学力を詳細に把握する必要があります。新入生の学力をどのように把握していますか。

茅原 本校では、小学校から送られる指導要録の抄本を土台に、各教科の日々の授業を通して把握していきます。ただし、指導要録は三段階評価ですから、細かいところまでは分かりません。きめ細かく指導するためには、算数なら、図形が苦手なのか、それとも分数でつまづいているのか、そうした単元レベルでのデータが必要なのです。出来れば一人ひと



茅原 定着度を測るテストは、子どもの学力の何が足りないのかを細かく把握し、次の手立てに生かすために非常に有効です。区の平均点と比べることによって、学校としてどこに力を入れるべきかが早い段階で分かります。そうすれば、年間指導計画にも生かされます。ただし、学校単独でのテストの実施は、作問や採点の負担から厳しい面があります。檜原村のように、自治体が一斉に行ってくればよいと思います。

入学直後の合宿は 学習・生活の両面で効果大

—— ガイダンス以外に何か有効な方法はありませんか。中学校入学前の春休みに中学校が宿題を課しているケースもあるようです。

とりの学力を早い段階で知るために、入学直後にテストを行いたいと考えています。

渕上 檜原村は、小学3年生から中学3年生まで、年1回、学力テストを実施しています。基礎的な問題が出来ているかを確認し、7年間の学力の推移を把握するのが目的です。毎年4月中旬に行い、前学年の学習内容から出題します。

ところが、実施時期は早いのに、結果の第一報が返ってくるのは中間テストより遅い6月中旬です。もう少し早い時期に結果が出た方が、より活用できると思います。

茅原 良い取り組みだと思います。中学校で始まる学習に向けて、生徒は気持ちを新たに出来ます。ただし、どの学校にでも出来るかと言えば、そうではありません。例えば、本校のように比較的多数の小学校から生徒が集まるような学校では、入学前に宿題やプレテストを課するのは難しいのが現実です。むしろ、入学後の出来るだけ早いタイミングで、生徒一人ひとりの学力を把握できるように取り組みの方がよい場合もあるでしょう。

渕上 入学前の課題は、学校の置かれた状況や、小中間の連携度合いによると思います。本校はここ5年ほど、小中連携に力を入れて

きましたが、そうした取り組みを実施するた
めにも、日頃の授業交流や研究会を通して、
相互の信頼関係を高めていくことが大切だと
感じています。小学校の信頼を得られるかど
うかが、まずは大切になります。

茅原 中学校独自の取り組みを考えるのなら
ば、合宿という方法もあります。以前、勤務
していた中学校では、入学式の1週間後に1
泊2日のオリエンテーション合宿を実施して
いました。中学校での学習方法や朝礼での並
び方などを徹底的に指導するのです。新入生
全員で同じことをするというプログラムは、
仲間意識を育む上でも効果的でした。入学当
初の「変わりたい」という子どもの意識とう
まく合致する取り組みだと思います。現任教
のある江戸川区には、適当な宿泊施設がない
のですが、何とか実施したいと考えています。

渕上 生徒指導に課題を抱える東京都内のあ
る自治体では、3年ほど前にオリエンテー
ション合宿を始めました。そこでは学習習慣
を身に付けさせるために、徹底的に規律を守
らせて学習に取り組ませようです。余暇の
時間も読書させるほど徹底していると聞いて
いますが、こうした取り組みは生徒指導的な
側面からも有効です。

学校としての指導の統一と 9年間を見通した視座の共有を

—— 導入期の学習指導を充実させるために、

中学校導入期に学習習慣を定着させる

学校経営者としての校長には、どのような役割が求められるのでしょうか。

茅原 入学期に最低限指導してほしいことや生徒に守らせたいルールなどは、学年の教師任せにせず、学校全体で統一する必要があると思います。学校としての方針を示しておけば、担任の指導経験にかかわらず、新入生は皆、同じようにスタートを切れるからです。例えば、本校では、教室の席順について男子列・女子列というスタイルをやめて、男女が交互になる席順に統一しようと考えています。私語がしにくくなるからです。

生徒の現状を把握するために、「こういうデータを取ってみよう」と主導するのも校長の役目だと思います。例えば、本校が10年程前に行った調査で、1年生の通塾率は約60%という結果が出ました。先生方はずっとその感覚を持っていましたが、09年度に改めて調査をしたところ、通塾率は40%という結果が出ました。これを受けて、学校外での学習を支援すべきという意見が出て、定期テスト前の土曜日に希望制の補習教室を始めました。古い感覚をそのままにせず、今、目の前にいる生徒の実態を捉え、それに合わせた取り組みをしなければなりません。

測上 中学校の課題は学習面だけでなく、生活指導や保護者への対応など山積みです。先生方は日々の指導に追われて、取り組みたいことがあってもなかなか出来ない現状にある

と思います。そうした中で、先生方の意欲を高め、現状を変えるためには、取り組みの必要性を教職員に周知、理解、納得させ、一人ひとりのモチベーションを上げること、地域の子どもを責任を持って9年間かけて育てるという意識を持つてもらうことが大事だと考えます。

茅原 例えば、数学の教師の中には、分数のかけ算やわり算を小学校の何年生で習うのかわからない人もいます。少なくとも自分が担当する教科の9年間の内容を知らずして、中学校の教師は務まりません。

11年度には小学校で新学習指導要領が全面实施となります。本校では、小学校の新しい教科書をすべてそろえたいと考えています。小学校の学習内容を把握せずに、中学校の新学習指導要領へのスムーズな移行は出来ません。こうした土台があれば、新入生の学力を把握するためのテストを学校独自で作成することも可能になるでしょう。小学校で育てていただいた子どもたちを受け入れる中学校の教師は、小学校の領域を含めた義務教育9年間を見通して、指導力を高めていくことが重要だと思います。

生徒に身に付けてほしい学習習慣

自ら「学ぶ」姿勢

◎「習う」ことと「学ぶ」ことの違いを意識。定期テストに向けて、自ら計画を立て、学習し、テストで確認。結果が返ってきたら復習する。この学習サイクルが受験勉強につながる

学習習慣の定着に向け導入期に行いたいこと

新入生の学力の早期把握

◎生徒が小学校で受けてきた教育はさまざまで、学力も差がある。得意は何か、どこでつまづいているのかを、単元レベルで把握する

生徒の意欲を生かす指導

◎新生活を迎え、生徒は不安もあるが、期待も持っている。宿泊合宿やガイダンスなどを行い、「変わりたい」という意欲を逃さずに学習方法を伝える

導入期指導で校長に求められる役割

学校としての指導の統一

◎担任の指導経験の差を埋めて、生徒が一斉に良いスタートを切れるよう、指導の統一を図る